

フィクションのレシにおける確実さと不確実さ

——アルマンズの幸せと「幸せ」——

粕 谷 雄 一

先の拙論《*Armançe ou la construction oblique*》¹⁾において筆者はスタンダール『アルマンズ』の主人公オクターヴがみずからの世界を認識、構築していく際にどういう情報を信ずべきものとして採用するかということを観察した。いま本論で問題とするのは、語り手の伝えることと読み手の構築との関係である。筆者はこれら二つの構築を相同的にとらえることが可能だと考える。すなわち『アルマンズ』の主人公が自分に直接伝えられてくる情報を疑い、ある種ななめの経路を通して入ってくるものの中に真実を見るのに似て、この小説の読み手もある意味で間接的な形で提供される知識を信じ、端的な断言に対してはかえってその背後あるいは裏を読まねばならぬ状況に置かれているということである。

ところでなにかを疑い得るためにはそれが偽りである可能性がなくてはならない。しかしフィクションであるレシに向かって読み手が「これは偽りである。これらのことは本当は起こらなかった」と本気で難ずることは明らかにあまり意味がない。それではフィクション内にそれと名指して意味のある偽りとはどのようなものであろうか。

まず実際の物理的な行動の記述が偽りでありえないことは自明である。なぜならもし物理面において嘘をつこうとして「本当とは違う」行動、出来事がフィクション内に書き込まれているなら、そこにあるのは「別の」レシということになるからである。

オースティンの言う行為遂行的言表も偽りではありえない。たとえばオクターヴがアルマンズの求めに応じて、彼女に結婚を求めないことを誓う（第23章、173頁。以下頁数は Classiques Garnier 版(1962)による）とき、「誓うよ」*je vous le jure* という言表が行為遂行的であるということそれ自体が既にこの

1) *Gallia*, No. 28, 1988, p. 25-32.

言表を偽りと見なすことの無意味さと同値であると言っていい。うわべは誓っていてしかも「本当は」誓っていないなどということが意味を持っていないことはあきらかであるから。たとえこの誓いがあとで反故にされたとしても「誓った」ということ自体は消しようがないのである。

以上はフィクションのレシ内の登場人物にとってもそのフィクションの読み手にとっても等しく成り立つが、読み手にとってのみ不可能な偽りがある。それは複数の個体に置ける純粹に内面的な行為、たとえば外面的現われが問題にならないときの「考える」などの内面的行為である。現実またはレシ内の「現実」においてなら偽り不可能性は単独の個体の内面性についてしか成立しないのに、フィクションのレシにおいては読み手が意識を跳び移れるという独特な性質があるのである。「オクターヴは～と考えた」と「アルマンズは～と感じた」という記述が共存していて片方あるいは両方が偽りだとしようとしても、物理的な行動の記述に關すると同じく出来上がるのは偽りではなく「別の」レシになる²⁾。

しかし、外面的表出、標識、典型的な随伴行為を持った内面的行為や状態の記述において、及びそれと関連してその種の行為の反復を前提としその総括的記述と規定することのできるある性格の描写などにおいては偽りと呼んで意味のある偽りが問題になってくると考えられる。なぜならこれらは「装うことが可能なもの」だからである。そして『アルマンズ』はこの種の偽りが問題になってくる顕著な例だとわれわれは考えるのである。

登場人物の内面的眞実を他の登場人物が発見する

たとえば「彼の父、マリヴェール侯爵は一人息子をパリにとどめておきたかった (souhaita)」(第1章, 5頁)と述べられるとき読み手の確実さはマリヴェール侯爵と共にある。マリヴェール侯爵はあることを望んで (souhaiter) いる。そのことを侯爵が自分で気付いていないということもありうるがそれはここでは問題にならず、読み手がそのことを「知っている」ということだけでよい。「マリヴェール侯爵は息子をパリにとどめることを望んだ」という命題はレシの他の部分と論理的に矛盾を起こしていないので、たとえ積極的に整合するというわけでもなくてもこのことをレシ内の眞実であると認めるのになら問題はないはずである。

にもかかわらず『アルマンズ』においては「望む」souhaiter という動詞の

2) 価値判断はともかくも、フィクションではそれができるのである。

内面性、および外的表出を持っているというそのこと自体が本質的な不確実さを導入している、と感じられる。「望む」のような何らかの典型的表出があることが期待される事象は、装うことが可能なのである。それにふさわしい態度があるしその意志を伝えるための言葉の選択肢にもこと欠かないからだ。それゆえオクターヴはこの父の「望み」の本当さを確かめるために相当時間をかけ観察し、判断したのである。そのことは上の一文に続く「彼の尊敬する父と、ある種情熱的と言えるほどに愛している母とがこのようにしてほしいとずっと願っているということにいったん確信をもつと、彼は砲兵隊に入る計画を断念した」(同、強調筆者)という記述が示す時間的間隔からうかがうことができる。つまり断言の形で提示された「父の意向」がまぎれもなく本当であるということは、全知のはずの語り手の言葉より判断を誤る可能性を持ったオクターヴを通じなければ読み手に保証されないというわけである。

同じように読み手の女主人公アルマンズの内面についての確信はオクターヴを通して与えられる。たとえばアルマンズのある「視線の意味するところを見誤ることは不可能だった」(第2章, 21頁)と語り手が述べるだけで十分なところに「少なくともオクターヴの判断力はそのように断定したのだ。ちょっと想像できないほど厳しい彼の判断力は」(同)のように最終的な責任をオクターヴに負わせることを確認する言葉がつけ加えられている。

もっとも、おおくの場合オクターヴは彼女の感情の真実について正しくとらえても、そこからの判断において誤りをおかしてしまう。たとえばオクターヴの愛が確かめられたため陽気になった彼女を散歩中に見て、「四分の一里も行かないうちに彼は、従妹の彼に対する態度の中に少しよそよそしさが増えたことを、またはっきりと陽気な気分にあることを認めたように思った」(第13章, 106頁)のは正しかったが彼はそこから：「彼女が結婚するのは明らかだった」(同)という誤った解釈を引き出した。アルマンズへの愛を自覚してから初めて彼女と昼食を共にしたときも同様に、態度を正しくつかみながらもその解釈において誤っている：「オクターヴはゾイロフ嬢がときにかなり冷静に自分を見ているのを認めた。これがつまり、愛している女を見ることが与える印象というわけか、とオクターヴは思った。でもアルマンズは僕に友達としての友情しか持っていないということもありうる。夕べ別のことを考えたのはまたしてもうぬぼれのなせるわざだったということだ。」(第19章, 145頁)しかしこれらの二次的な判断が誤りととらえられるのは、これを誤りとしないとレシが論理的に矛盾をきたすからである。第一次的材料の情報の本当であることの責任はやはりオクターヴが担っているのである。

ボニヴェ侯爵夫人の性格の偽りを読み手が知るのもオクターヴの直感からである：「侯爵夫人はたいへん背が高い今をときめく人だったし、まだたいへん美しくさえあったのだが、これらの長所もオクターヴにはなんの印象も与えなかった。不幸にも彼が夫人の物腰の内にくらかの気取りを見てしまったからだ。この欠点をどこかに認めてしまうと彼の精神はもはやその人を馬鹿にするためにしか働かなくなってしまうのだった。」(第5章, 53頁)

このように他の登場人物の内面についての情報の確からしさについて責任を負わされるのはオクターヴだけではない。特にオクターヴの内面的真実については多くマリヴェール夫人が伝えてくれる。彼女は「(オクターヴの心については) わたしは確信してますよ。だってわたしはあの子の母親なんですもの」(第12章, 96頁) というように自負を持っていて、彼女の判断はおおむね正しい。たとえばオクターヴがドーマール夫人に恋など全然してないということを見抜くには「この二人が一緒にいるところを見るだけで十分だった」(第12章, 99頁) のである。その他オクターヴの陰鬱な性格は多くこの母の認識を通して語られる。たとえば、「実生活というものは彼女の息子にとって情動の源であるどころか苛だち以外のいかなる効果ももたらさないようだ、とマリヴェール夫人は常に見ていた。まるで現実とはぶしつけにも大切な夢想から彼の気を散らし、彼をそこから引きはがしにやってくるものだと言わんばかりなのだ」(第1章, 16頁) のように。

またマリヴェール夫人はアルマンズの内面的真実の保証もしてくれる。たとえばアルマンズが「本当に」幸せの極致にあるらしいということは夫人の判断：「アルマンズの目に浮かんだ至上の幸せがマリヴェール夫人をほっとさせた(13章, 103ページ)」によって読み手に知らされるのである。

このようにこの小説では他の人物の内面的真実を保証する役割がおおむねオクターヴとマリヴェール夫人によって果たされている³⁾。この限定にはもちろん意味があると考えられるが⁴⁾、われわれのここでの主張は、これら情報の真実であることの保証が登場人物に委ねられて相対化されているということ、すなわち不確実化されているということそれ自体にすでに意味があると考えていいのではないか、ということなのである⁵⁾。

3) アルマンズは、ここで論じているような内面的真実の発見者としては副次的な位置しか占めていない。

4) マリヴェール夫人の視線の重要性を精神分析的見地から特に強調しているのが Pierre Bayard である。Cf. *Symptôme de Stendhal: Armançe et l'aveu*, Lettres Modernes, 1979, p. 16.

5) だから彼等をジェイムズ流の reflector と呼ぶなどして特別視することはここではしない。

なぜなら、まず真実の発見が一般的な人に委ねられている場合もあるということがある。たとえばボニヴェ騎士について、「普通の人なら興味を覚えるはずのもの全てに対して彼は共感を奇妙なまでに欠いているように人は感じた (on sentait)。この若者は皆とは違った将来を歩もうとしているのだ。ありとあらゆるものに対する心からの不誠実さが彼の中にあることを人は見出だしていた (on devinait)」(第25章, 192頁) という「正しい」判断を下すのは周囲の人々である。

また相対化、不確実化が次に見るように語り手自身だけによってもなされているからである。

語り手が自ら確実さを留保する

先の拙論《Le rôle de la parole dans *Armance*》⁶⁾でも引用したマリヴェール夫人の性格描写の記述において、「希望する」espérer, 「恐れる」craindreと言った動詞のあらわすものは内的状態とその外的表出の強固な一致を持っているがゆえに、語り手に偽善, あるいは感情の偽りの可能性を意識させずにはおかないものと思われる: 「彼女は他の人達が希望を抱いたり恐れたりするときつける理屈の中に自然に入って行った。するとまもなく彼女自身も希望を抱いたり恐れたりするように見えるのだった。」(第1章, 7頁)

このような「~のように見える」sembler は他の登場人物の視点の持つ相対性によると言うわけにはいかない。紛れもなく全知の立場に立ちうる語り手がその特権を放棄して自らの報告に形の上での不確実さを導入しているのである。「マリヴェール夫人には気取りはけっして近付かなかったのである」(同) という但し書きはかえって先の情報の形式的な不確実さを浮きたたせる役割を果している。

オクターヴの内面に関する描写の中にもsembler やそれに類する確実さの留保表現をたくさん見ることができる: 「オクターヴは何も望んでいなかった。何ものを以てしても彼に苦痛も快樂も覚えさせることができないかのようにだった (semblait)」(第1章, 6頁); 「彼の深い憂鬱の原因が何であるかはともかく, オクターヴは年にも似合わぬ人間嫌いのようにみえた (semblait)」(同); 「オクターヴの目はときどき天を眺め, 彼がそこに見ている幸せを映しだしているようだった (semblaient)。だがその一瞬あとに人はその同じ目に人は地獄の責め苦を読みとるのだった (on y lisait)」(同, 15頁); 「もっと穏やかな

6) *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, No. 58, 1991, p. 93.

ときにはオクターヴの目は、そこにはない幸せを夢みているように見えた (semblaient)。ただ一つの愛するものから大きく隔てられてしまった優しい魂、といえるだろう (on eût dit que ~)。(同)

オクターヴが彼の「恐ろしい秘密」をアルマンズに告白しようとして果たせない場面では、当然のように彼の苦しむようすが外側から眺められ、彼の内面に関する記述はまさしく「～のように見える」sembler, 「～のような」commeなどで不確実化されている：「[...] ——でも君を崇めているって言うこの男は、まともな人間じゃないんだ。こう言ったときオクターヴからうっとりとした態度が消えたように見えた (sembla)。突然彼は怒ったように (comme) なった。」(第29章, 224頁)

この描写はもちろんアルマンズの目を通していてもよい。だが判断の主体が誰であれフィクションのレシでは簡単に達成できてしまう登場人物の内面的真実についての絶対的确实さに保留がつけられねばならないことを示すのが本論の目的である。

アルマンズの生いたちについての記述も、彼女の内面に関しては注意深く断定が避けられ、外からの描写、すなわち确实さに保留がつけられる表現が用いられている。語り手は当然のように要求できるレシ世界に対する全知という優位を放棄あるいは放棄させられている。たとえば彼女の性格描写において、年若いにもかかわらず多くの不幸を味わったことが及ぼした影響が次のように語られる：「生活の中で起こる小さな出来事が彼女の心をまったく動かすことなく滑っていくようにみえる (semblaient) のはたぶん (peut-être) そのせいだったのだろう」(45頁)；「彼女も激しく心を動かされうるということを彼女の目の中に読みとることが不可能ではないこともしばしばあった。(quelquefois il n'était pas impossible de lire dans ses yeux que~)」(同)；「アルマンズは暮しの中で突然に起こった変化がどんな結果をもたらしうるか、一目で見通してしまう能力があった。それが彼女の血管を流れるサルマチア人の血によるものか、あるいは小さい頃から不幸を味わってきたことによるものか、私は知らない (je ne sais si~)。」(第12章, 96頁)

断定的表現は偽りの印である

逆に、『アルマンズ』においては不確実性のない断言はかえって誤りであるかまたは皮肉としてとらえられねばならない。つまりその断言の字義的意味の反対がレシ内での真実だということになるのである。

「どんな仮定のもとでもけっして受け入れるまいと彼女が考えていた結婚に

関係のない障害は解消されたように見えた。ただオクターヴの心が彼女のものでなかった (mais le cœur seul d'Octave n'était point pour elle) (第12章, 99頁) のように、客観的眞実でないがゆえに語り手のものでありえずアルマンズの判断であるはずのものが、あまりに断定的に響いてはいないだろうか。「あの運命の日には、あなたがわたしを愛していないという確証をわたしは持っていました」(第29章, 223-224頁。強調筆者) などというアルマンズのせりふも、「愛していた」ことが眞実であると信じている人物に「確証」certitude などという言葉をやたらと用いさせているところにこのレシにおける確実性と不確実性の特異な逆転をかいま見ることができるのである。オクターヴがダンクル公爵夫人の中傷を聞いて「三分もたたないうちにゾイロフ嬢の沈黙の説明がついた (se trouva expliqué)」(第2章, 23頁) と断定するとき彼は明らかに誤りの中にいるのだが、たとえそれが「オクターヴの心の中で」という限定を持った文を後ろに従えるにしても、この提示の仕方自体からは読み手にうっかりこれを眞実ととらせてしまいそうな強い調子が感じられるのである。

また皮肉な描写、カリカチュアが主に副人物の扱いに顕著である。たとえば、もとドーマール邸につかえていた下男について「この元兵士は大変利にさとく、狡猾だった」(第11章, 92頁) だったはずなのに、たいして金もせしめることなくドーマール夫人の素行をオクターヴにべらべらしゃべってしまっている。決闘で怪我をしたオクターヴを介添人のドリエ氏が担ぎこんだ家の主人は「大変人情のある男だった。ところでドリエ氏は彼の家に入るなりたんまりと金を握らせたのだったが」(第21章, 161頁) と、彼の人間性について逆のことを考えさせてしまうような提示の仕方がされているのである。

アルマンズの幸せと「幸せ」

以上のような観点から考えてみるならば、『アルマンズ』の最終章、すなわち第31章におけるアルマンズの「幸せ」についての記述の様態はきわめて興味深いものであることが理解される。

第30章の末尾に至っても、彼女が「本心から (elle était de bonne foi) こう語った」(241頁) という記述が示す通り、読み手は語り手と共にアルマンズの心の許にある。しかしこの最終章に至ってアルマンズの内面描写が姿を消し、読み手はオクターヴと一緒に不透明になった彼女を外側からのみ眺めることになる。

そこでオクターヴを当惑させるのが他ならぬアルマンズの幸せさである。新婚旅行の最中にギリシャ独立戦争に参戦するという口実でアルマンズと離れよ

うとするとき、「オクターヴ自身もアルマンズの幸せさを自らに隠せないで、彼の目にははなはだ重大な過失と見えたことだが、出発を一週間先に延ばした。」(第31章, 243頁) また「彼は自分の新妻の幸せさにうっとりとした」(同) のである。

アルマンズの「幸せ」は、オクターヴにとっては偽りのものである。しかし読み手は、彼がそう信じているのは贋手紙にだまされているからであることを知っている。してみると、例によってオクターヴによるアルマンズの内面についての二次的判断は信じるにたりないが、偽りであることを「知っている」つもりのオクターヴでさえ真実のものとしか思えないような幸せの外観を提示された読み手は、これを本当のものと判断するよう強いられる思いがするのではないか。だから逆に「アルマンズの完全な喜びが彼を幸せにしてしまうような、錯覚 illusion の瞬間があった」(同) と書かれているとき、それが「錯覚」つまり誤ったものであるということはオクターヴにとってこそ本当であるが、読み手にとってはそのオクターヴの判断こそ誤りであるにとらえる方が自然に感じられるのである。

ここでオクターヴが信じているとおりアルマンズが幸せを「装って」いる、はては後世の読者が「知って」いる主人公の不能のため「結婚が達成され」ないことに対する不満を彼女が隠している可能性を考えるのはあまりに無理がありはしないだろうか。むしろわれわれがこれまで見てきたスタンダールのレシの特性からして、アルマンズが外側からしか見られていずオクターヴを通してしかその心判断できないということ、そのため不確かさがあらわになっているということ自体が「幸せ」の真実であることをさし示していると考えべきなのではないだろうか。そう考えるならアルマンズが結婚関係を「友情」の延長物、その完成状態としてとらえていて、その至福に「本当に」酔っているということを間接的に指し示していることにもなる⁷⁾。

これらのことは主人公の肉体的欠陥が明らかにされていたなら達成できない効果である。結婚直後、ギリシャ独立戦争に参戦する誓いを以前たてていたと言い出したオクターヴに対するアルマンズの態度について「結婚以来十分幸せだったので彼女は絶望することもなくこの一時的な離別に同意した」(第31章, 243頁) と説明される。オクターヴの目から見たアルマンズの「幸せ」、つまり偽りのもの、イロニーとしての「幸せ」から言えばアルマンズのしたことは不思議ではない。もしこの上オクターヴの性的不能が読み手に明らかにされてい

7) 拙論《Le rôle de la parole dans *Armanca*》を参照されたい。

たならアルマンズがこのような皮肉な「同意」を与えるのも当然ということにならざるを得ない⁸⁾。「一時的な (momentannée) 別離」の語がおそらく偽りのものとなるであろうということを知っている読み手にとってアルマンズの不透明さが際立って感じられる箇所であるだけに、いっそう彼女の幸せの本物であることがレシの力によって感じられるのである。

以上のことを次のように言い表すことができよう：もし『アルマンズ』最終章における女主人公の幸せが事態のありさまの真正面からのあからさまな記述のされ方をしていたならばそれは読み手においてはかえって皮肉としてとられるべきもの、つまり括弧つきの「幸せ」になってしまう。その幸せを本当のものにとらえざるをえないという判断の責任がオクターヴの直接的な知覚のレベルに追いやられているからこそ読み手においてアルマンズの幸せが客観的真実としての本当らしさを逆説的にも獲得することになるのである。そしてその印象はオクターヴが贖手紙にだまされていると分かっているだけにますます強化されているのである。

(D. 1987 金沢大学文学部助手)

8) この同意は『バルムの僧院』でファブリスがクレリアに与えたクレセンチ侯爵との結婚の許しに比すべきものであるかもしれない。なぜならどちらも「相手がたてた誓いを尊重する」ことが問題になっており、またどちらも悲劇的結末を準備する役割を果たしているからである。